弔辞

半世紀にわたる、あなたと私の伯父・甥の関係、そして、アルプス子ども会会長と事務局長との三十余年にわたる活動を振り返れば、浮かび上がる情景にきりはありません。

二週間前、見舞いに訪れた際に、手を握りながら耳元で子ども会としぶき荘のことは我々に任せ安心していてくださいと伝えると、あなたは握ったその手を放さず、私の肩を引き寄せ、不意に抱き締めました。今思えば、あなたはその時、自らの死期が近いことを間違いなく悟っていたのでしょう。

媒酌人をお願いした私の結婚式から奇しくもちょうど二十年後の同じ一月二十二日、あなたは誰にも迷惑をかけまいとするかのように突然、生涯の幕を閉じました。まさか、二十年後に、祝辞を弔辞でお返しすることになるとは、この運命の残酷さを痛感するほかありません。

思い起こせば四十年前の二月、東京から駒ヶ根に向かう車で、当時まだ舗装が完了していなかった甲州街道を走る途上、あなたは長男の高校入試の結果を聞くために、雪の中、電話局を探す親としての姿がありました。

二十五年前の今日、一月二十五日。当時しぶき荘にあった丸い池が何人乗ってもびくともしないほど凍り付いた寒い日、私は駒ヶ根に来ていました。あなたの初めての内孫誕生の知らせに、駆けつけた昭和病院の坂が大雪で上れずに、一緒に車を押したことが瞼に浮かびます。そこには祖父としての姿がありました。

仕事の中であなたは、何度も何度も同じ話をしたり東京の国電のことをいつも戦前の呼称である「省線」と言ったりしていました。今私はまだ往年のあなたよりずっと若いはずなのに、家族から「もうその話は何度も聞いた」と言われ、ＪＲのことをまだ国鉄と言ってしまいますが、それは上司としてのあなたの姿が強烈だったからに他なりません。

一九七〇年代初めの夏、今見ればなぜそこでやれたのかと思うほど狭い、あなたの生家である「新屋」の庭で、親戚を集めた運動会を開きました。出し物大会もやりました。マイクロバスを借りての親族旅行にも行きました。自転車の遅乗り競走で惨敗した悔しさや、菊池寛『父帰る』を演じたあなたのおどけた姿を忘れることはできません。いずれも、それはそれは盛り上がって、あなたの実行力と求心力を見せつけました。

しかし、これらのイベントも、あるいはそれまでなされた数々の仕事――厚生省の役人に始まって屋外プールの敷物売り、肌着売り、タクシー運転手、佃煮屋、靴卸――それら総ては、その数年後に始まる全く新しい事業の前奏曲に過ぎなかったのでした。

四十八歳で十七名の子どもたちを集めて始めたアルプス子ども会は、今ではまさに日本中や海外から年間に延べ四千名、通算で八万名もの子どもたちを集めるに至りました。その間、リーダー同士の結婚も、実に三十四カップルに達しています。

一般には守りに徹する五十歳近くになってから、周囲の人生に極めて多大な影響を与える全く新しい世界を築き始める人が、一体この世に何人いるでしょうか。

忘れがたいのは、私が関わって三年目の夏前、代々木の生協会館で開いた研修会です。当時、どうしても大人の言うことを聞かない「悪い子」には手を挙げるのが普通だった時世において、あなたは子どもを叩いたことがある人に挙手をさせ「皆さんは叩いた時、どんな気持ちでしたか。決して子どもを叩いてはいけません」と、珍しく静かに語りました。

毎回の子ども会開会式では必ず「はい、一年生の人立って」とみんなで弱者を守ることを示し、それが結局は誰もが守られることになるのだという、まるで今の政治に伝えたいようなことを教えてくれました。障害児の一般参加も、二十一世紀の今なお、他団体がほとんどできていないことですが、初めから当然のように行われました。

一方であなたは、当初このアルプス子ども会のただ一つの約束として「自分勝手なことをしない」を掲げていましたが、いつも自分勝手なことをしたがるのはあなたでした。

何の打ち合わせもなくいきなり朝四時に起きて、「さあ、これから釣りに行くぞ」と子どもたちの眠りを破るあなたに対し、リーダーたちは呆れ驚きを超越した、一種の敬意を抱くしか為す術がありません。あなたは素晴らしい反面教師として立ちはだかり、リーダーたちはあなたの自分勝手を止めるために大いに力をつけました。

そうして、即ち「自分勝手なことをし合って、迷惑をかけたりかけられたりする中で、人間関係を築いて行く」ことを身をもって教え続けてくれました。権力に対する、持ち前の反骨精神からか、自分に反論したり従わなかったりする人を、大切にしてもくれました。

それゆえに、あなたの訃報に接して、遠方からも大勢の人々が駆けつけ、日本中から弔電や電子メッセージが次々と寄せられ、しかも、それらのほとんどに駒ヶ根であなたと過ごした心に染み入る思い出が綴られているのです。

この特別な場所で笑ったこと、泣いたこと、けんかして仲直りしたこと、自分が誰かの役に立てたこと、仲間と力を合わせて何かを作り上げたこと、みんなでうたった日々のこと。それらは間違いなく、単なる夢世界の刹那的体験に止まらずに日常生活を楽しく過ごすための力に昇華しています。

「近ごろの若者は」という言い方をしばしば耳にしますが、どっこい、あなたが育てた大勢の若者たちは、これからも輝き続ける社会の力強い担い手です。自分の頭で考え、他者を思いやる自由で奥深い心を持ち、問題を共に一つずつ解決してゆける仲間を作る力がある、そんな大人を育ててくれたのです。

私たちは、より多くの人にとって生きやすい、より民主的な社会を支え、守る人の創造を、これからも続けます。

会長先生、ありがとうございました。　伯父さん、さようなら。

二〇〇九年一月二十五日

でこぴん　こと　綾崎幸生